

(6) 昆虫類 ⑩ アミメカゲロウ目

アミメカゲロウ目の昆虫は日本には12科、57属、150種（日本昆虫総目録,2014）が生息し、埼玉県からはこれまでに11科73種が記録されている。

アミメカゲロウ目はウスバカゲロウを含む仲間で、大型な種も多数含まれるものの目立たない地味な色彩の種類が多く収集の対象となり難いこと、大型種の多くが夕方から夜に活動する生態を持ち採集しにくいことなどから、アマチュアによる分布資料が散発的で少なく、その結果、大型種でさえ生息状況が把握できていない。一方でアミメカゲロウ目に所属するウスバカゲロウ科の幼虫はいわゆる“アリジゴク”として有名であり、昆虫類にあまり興味を持たない人でも知っている、という一面を持っている。

牧林（1998）は、埼玉県昆虫誌にアミメカゲロウ目を含む脈翅類の記録を整理したが、これにより埼玉県内のアミメカゲロウ目全体像が初めて明らかになった。その後の記録・報告は多くないものの、県内の記録種数は少しずつ増加してきた。また、現在までに外来種や迷入種は記録されていない。

これら73種を対象に本県における生息状況を調査した結果、今回新たにオオウスバカゲロウ、クビカクシヒメカゲロウ、キチジョウクサカゲロウの3種を加え、全体の約12%にあたる9種を掲載種とした。

これまでのアミメカゲロウ目昆虫の掲載種数の変遷をみると、初版と改訂版では5種、前版での6種、そして本書の9種と少しずつ増加している。

このような対象種数の変化は、調査が繰り返されるごとに生息状況の情報やデータが増加し、分布状況の解明度が進んできたことによるものである。一方、ケカゲロウのように、生息状況が把握しきれていない種もあり、潜在的な希少種も残っていると見える。

日本産のミズカゲロウ科の幼虫は水生であり、ヒロバカゲロウ科、シロカゲロウ科の幼虫の多くは水生または半水生とされている。生息に適した池沼や湿地は、特に平野部から丘陵地において減少が進んでいるため注意が必要である。幸い、主に平地に生息するミズカゲロウはまだ健在と判断できる。

丘陵帯から山地帯にかけては大型の種が生息しているが、その中には希少な種が含まれている。河原に広がる砂地には、乾燥と高温といった特殊環境に適応したクロコウスバカゲロウやオオウスバカゲロウが生息する。溪流際にはウンモンヒロバカゲロウ、プライヤーヒロバカゲロウなどの希少種が生息している。これらの種は夕方の薄暮の時に最も活発に活動し、長い翅でフワフワと飛翔するが、その生息に適した水辺は減少傾向にある。

また崩壊地や背丈の低い草原を好むキバネツノトンボは生息適地の減少に直面している。治水政策としての河川整備や、低山地などでの草地の森林化などは、崩壊地や荒れ地を好むキバネツノトンボには不利なものとなる。

幼虫期の生態を把握しつつ調査を進める必要もあるが、クビカクシヒメカゲロウなど解明され

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

ていない種や、わかっているにもかかわらず調査が容易でないケカゲロウのような種もある。

[付記] 次ページ以降の種ごとの解説における国内分布に関する項目は、原則、日本昆虫目録 第5巻(2014)を参照した。

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

科名	ウスバカゲロウ科	埼玉県(2018)	CR	環境省(2015)	-
〔和名〕	オオウスバカゲロウ	指定状況			
〔学名〕	<i>Synclisis japonica</i> (Hagen)	-			
【形態】	体長約45mm、翅長55～60mmのウスバカゲロウ科の日本最大種。頭部、触角、胸部は黒色で、前翅の前縁小脈は網目状。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州、南西諸島				
【主な生息環境】	日本では主に海岸の砂地に生息するが、埼玉県などの内陸地では河川際の広い砂地に生息すると考えられている(栃木県, 2005)。このような環境は限られており、今後増加するとは考えにくい。幼虫はすり鉢状のアリ地獄は作らず、砂の下に潜んで獲物を待つ。成虫は7～9月頃に発生する。				
【県内での生息状況】	これまでに秩父市だけで記録されている。荒川の河川際の砂地で少数が生息しているものと推測されるが、近年の記録は無い。				
【特記事項】	同様な環境には、クロコウスバカゲロウが生息する。本種の幼虫は巣(アリジゴク)を作らないが、クロコウスバカゲロウは巣を作る。				

科名	ツノトンボ科	埼玉県(2018)	CR	環境省(2015)	-
〔和名〕	キバネツノトンボ	指定状況			
〔学名〕	<i>Libelloides ramburi</i> (M'Lachlan)	-			
【形態】	体長21～24mm、翅長23～29mm。黒い体色で、後翅は黄色と褐色の複雑な模様を呈する美麗種。触角が極めて長く、その先端部は丸い。				
【国内分布】	本州、九州				
【主な生息環境】	埼玉県における自然状態での主な生息環境は大きく2つに分けられる。一つは「河川沿いの河原及びその周辺部の背の低い草地」で、もう一つは「森林内が土砂崩れなどで崩壊し、一時的に生じた背の低い草地～ススキ原」である。“攪乱地”という点で2つの環境は共通である。成虫は5～6月に発生する。				
【県内での生息状況】	熊谷市、深谷市、上里町、滑川町、鳩山町、長瀨町、秩父市、小鹿野町で記録がある。背の低い草地環境は、多くの場合、何らかの人為的行為が講じられることで維持継続している場合が多い。本来自然植生は、遷移によって森林化してしまうからである。河川増水で遷移が進行しにくい河川敷などを除くと、キバネツノトンボが継続して発生できる環境は固定的でなく、このような攪乱地が今後増えるとは考えにくいことから、発生地はより限定されていくと考えられる。				
【特記事項】	本種は移動性が高いと思われ、発生地でない場所を拡散飛翔中の個体が見つかる事が予想される。このため、伐採後の一時的な広い荒れ地・草地での発生などにも注意を払っておく必要がある。				

科名	ヒメカゲロウ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	-
〔和名〕	クビカクシヒメカゲロウ	指定状況			
〔学名〕	<i>Drepanopteryx punctata</i> (Okamoto)	-			
【形態】	体長約9mm、翅長約13mm。前翅は茶色で全体皮針形、2列の白斑列がある。頭部は胸部に密着する。				
【国内分布】	北海道、本州、九州				
【主な生息環境】	比較的標高の高い場所で見つかる種で、1,000m程度で得られるとされており(脇, 2004)、山地の植物相が豊かな草地・水辺を備えた混交林に分布する。スーピングで採れた事があるが、ライトトラップにも飛来する。				
【県内での生息状況】	小鹿野町の両神山でのみ確認されている。個体数はエグリヒメカゲロウよりずっと少ない。幼虫期の生態は確認されていない。生息には、植物相が豊かな草地・水辺を備えた混交林が必要と考えられる。				
【特記事項】	本種の記録は、近縁のエグリヒメカゲロウと比較して全国的に非常に少ない。数少ない報告のひとつである神奈川県における本種の記録では“生息数は極めて少ないと思われる”と記述されている。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

科名	クサカゲロウ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	-
〔和名〕	キチジョウクサカゲロウ				
〔学名〕	<i>Apertochrysa kichijoi</i> (Kuwayama)	指定状況	-		
【形態】	体長 6.5 ~ 7.5mm、翅長 11.5 ~ 13mm。腹部の腹面は赤褐色。頭楯に黒紋を備え、小顎鬚は黒い。				
【国内分布】	北海道、本州（関東以北）				
【主な生息環境】	埼玉県では、6 ~ 8月に山地で確認されている。幼虫の生態などは不明の為、最適な生息環境は確定できないものの、標高が高く、且つ植物相が豊かな草地・水辺を備えた混交林が必要と思われる。				
【県内での生息状況】	秩父市で記録がある。全てライトトラップへの飛来個体で、本来の生態はよくわかっていない。全国的に大変希少な種であり（田悟，2010）、本県の個体数も非常に少ないと思われる。				
【特記事項】	クサカゲロウ科の同定は全般にかなり難しいが、本種のオスであれば、ゲニタリアのアーム状の構造部を外から確認することで確定可能。				

科名	ヒメカゲロウ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	エグリヒメカゲロウ				
〔学名〕	<i>Drepanpteryx phalaenoides</i> (Linnaeus)	指定状況	-		
【形態】	体長約 9mm、翅長 13 ~ 15mm。頭胸部及び前翅が茶色で、前翅の先端は尖り、外縁はえぐれる。頭部は胸部に密着する。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	比較的標高の高い場所で5 ~ 8月に発生する種で、植物相が豊かな草地・水辺を備えた混交林の山麓部~山地帯（ときに亜高山帯まで）に分布する。林道の葉上に静止している事を見かけるが、これまで県内で得られたことはいの多くはライトトラップに飛来した個体である。				
【県内での生息状況】	秩父市で記録されている。奥秩父エリアには広く分布していると推測されるが、個体数は少ない。近年、幼虫期の生態が青森県内での観察・飼育から報告されたが、幼虫は“ダケカンバの葉にアブラムシ（ <i>Hamamelistes betulinus</i> ）が作ったゴール（虫コブ）”の中でアブラムシを捕食して成長する（市田，2009）。本種の発生には生息条件の良い森林と周辺環境が必要である。				
【特記事項】	近縁種に、クビカクシヒメカゲロウがいるが、こちらの前翅はえぐれた形状を呈していないことで、同定は容易。どちらもカレハヒメカゲロウ属である。				

科名	ウスバカゲロウ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
〔和名〕	コマダラウスバカゲロウ				
〔学名〕	<i>Gatzara jezoensis</i> (Okamoto)	指定状況	-		
【形態】	体長約 23mm、翅長 28 ~ 30mm。全体細身のウスバカゲロウで、翅に不定形の褐色斑紋を備える美麗種。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	幼虫は、山地の道沿いの岩・崖・樹皮などの凹みに繁茂する地衣類や鮮類の間に潜み、地衣類の破片などを体表に付け擬態して、通りかかる昆虫などを捕食する。地衣類・鮮類が十分に育つ湿度を保った森林が主な生息地となる。成虫は初夏~秋に発生する。				
【県内での生息状況】	秩父市で記録されている。幼虫の生息環境が特殊であり、適した環境が少ない点で個体数増加に限界があると思われる。				
【特記事項】	斑紋が顕著な種に、マダラウスバカゲロウがいるが、こちらはより大型で前翅に半環状紋がくっきりと表れることで区別できる。				

科名	ヒロバカゲロウ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2015)	-
(和名)	プライヤーヒロバカゲロウ	指定状況			
[学名]	<i>Osmylus pryeri</i> M'Lachlan	-			
【形態】	体長約15mm、翅長24～27mm。頭頂部は黄褐色、顔面は暗褐色。翅脈は全体暗褐色で、白色部は無い。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	台地・丘陵帯～低山帯の川に近い林や森林に生息し、初夏～秋に発生する。幼虫は半水生と推測される。成虫はある程度川から離れた林内でも見つかる。成虫は夕方の薄暮の時間に最も活動的であるが、飛んでいても大変見えにくい。				
【県内での生息状況】	北本市、長瀬町、秩父市、小鹿野町で記録されている。次種ウンモンヒロバカゲロウより標高の低い場所でも記録されており、生息エリアは広いと思われるが、個体数は少ない。水質汚濁は幼虫の生息に悪影響を与えるため脅威である。				
【特記事項】	次種ウンモンヒロバカゲロウは非常に良く似ているが、翅脈の色と頭部の色などで識別できる。				

科名	ヒロバカゲロウ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2015)	-
(和名)	ウンモンヒロバカゲロウ	指定状況			
[学名]	<i>Osmylus tessellatus</i> M'Lachlan	-			
【形態】	体長約15mm、翅長24～27mm。頭頂部は黒、顔面は黄色く中央に二股の黒斑を備える。翅脈は概ね暗褐色で、白色部が混じる。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	低山帯～山地の川に近い林や森林に生息し、春～秋にかけて発生する。生態はプライヤーヒロバカゲロウと非常に良く似ている。幼虫は半水生で溪流の岸辺や岩の濡れた部分に生息し(志村,2005)、成虫は夕方の薄暮の時間に最も活動的である。プライヤーヒロバカゲロウと同様にライトトラップに飛来する。水質汚濁は幼虫の生息に悪影響を与えるため脅威である。				
【県内での生息状況】	横瀬町、秩父市、小鹿野町、飯能市で記録されている。いずれも記録は単発的で、個体数は少ないと考えられる。				
【特記事項】	プライヤーヒロバカゲロウは非常に良く似ているが、翅脈の色と頭部の色で識別できる。				

科名	カマキリモドキ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2015)	-
(和名)	ヒメカマキリモドキ	指定状況			
[学名]	<i>Mantispa japonica</i> M'Lachlan	-			
【形態】	体長10～15mm(変異が大きい)。前脚がカマキリの鎌状に特殊化している。前胸背は褐色。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	平地から山地にかけての森林に生息する。幼虫はクモ類の卵のうに寄生し摂食するため、餌となるクモ類が安定的に生息できる環境が条件となる。林縁の葉上やマント群落などで見つかることが多く、ライトトラップにも良く飛来する。				
【県内での生息状況】	川口市、所沢市、北本市、ふじみ野市、越生町、滑川町、日高町、小川町、横瀬町、秩父市で記録されているが、いずれも個体数は少ない。幼虫の食性・生態から考えて、個体密度は高くなりにくいと思われる。				
【特記事項】	近縁のカマキリモドキは、ヒメカマキリモドキより平均的に大型で、前胸背は黄色。前翅のR室は前種で2室、後者は3室であることで区別できる。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物